

目的 袖のいせこみ状態が、最も安定するいせこみ量は人工皮革では3 cmであり、織布の毛では5.2 cm、麻では4.2 cmであつた。この場合人工皮革では袖山曲線のゆるい設計試料の時に、いせこみ状態がより良好であり、また織布では袖山の高い袖山曲線の急な試料において、良好であるという結果を得た。今回は、各試料布のドレープ係数、剛軟度、厚さ、重さ等、これらの材料特性が袖つけ時のいせこみ量及びその状態にいかなる影響を与えるものであるか追究を試みた。

方法 実験に用いた試料布は、人工皮革、絹、毛、綿、ナイロン、ポリエステル、キュブラ、レーヨン、麻である。各試料布はドレープテスターにより、ドレープ係数とノード値を測定し、先に試作した袖試料の設計条件にしたがい、同様に袖試料を製作し、材料の特性と試料布によるいせこみ量の比較と、袖つけのできばえの検討を行つた。

結果 試料布ではドレープ係数が少ないほど、またノード値が多くなるほど、布の垂れ下がりは大きくなる。その順序は絹<毛<綿<人工皮革<ナイロン<ポリエステル<キュブラ<レーヨン<麻の順に大きくなる結果を得た。これら各試料布のドレープ係数及びノード値からみて試料袖を比較した場合、ドレープ係数が少なく、ノード値が最も多い試料は絹であり、この場合袖山の高さを低くしいせこみ量を少なくした場合に袖つけ状態が良好となつた。これとまったく逆の結果を得た麻の場合は、袖山を高くいせこみ量を多くした場合が良好で、袖つけの仕上がりも良好な結果を得た。